

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外での日本研究を支援すること、
そして海外の社会や文化への理解を日本のなかで
広げていくことは、相互理解を深め、
心をひとつにして共通の課題の解決に
向かっていくことにつながります。

国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの
形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、
また国際的に著名な学者を日本に招くなど、
学術や研究を通じて国際交流を積極的に
推し進めています。

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外における日本研究の促進

海外で行われる日本研究は、日本人や日本社会への理解を深めるだけでなく、それぞれの国と日本との良好な関係を維持するために重要です。日本を研究する人が活動を継続できる環境を構築するため、その国や地域において日本研究を担う中核的な機関への支援や、研究目的の来日の機会となるフェローシップ供与を行っています。また、研究者同士を結びつける機会を積極的に提供し、研究者間の交流の活性化をはかっています。

知的交流の促進

国際的な共通課題を理解し、その解決に向けて知的リーダーが国境を越えて取り組む場として、ワークショップや国際会議などを開催し、国際的な対話や研究を促進しています。また、さまざまな分野の有識者、専門家への訪日機会の提供や、多様な担い手が企画・実施する事業への支援を行っています。こうした知的交流を通じ、多層的、多角的な国際相互理解を推進することで、世界の発展と安定に向けた知的貢献をめざします。

ネットワーク強化

研究者間の緊密なネットワークを構築するため、国際会議やワークショップなど、対話を促進する場を企画しています。日本研究では、分野を越えた専門家同士の連携を促進するため、日本研究の国際会議を支援しています。また、海外の知日層との関係強化のための学会や、日本に留学経験のある日本研究者同士のネットワークづくり、国際会議の開催経費等、活動の一部を助成することでネットワークの多様化を推進しています。

フェローシップ

日本研究や知的交流の分野で優れた活動をする個人に対して助成を行います。日本研究の分野では、海外の研究者、博士論文執筆者、短期滞在研究者に対しフェローシップを供与しています。知的交流の分野では、海外の有識者・専門家に対し訪日機会を提供しています。また、日米のグローバルなパートナーシップを強化する観点から、研究者・ジャーナリストの研究・交流活動を支援する安倍フェローシップを実施しています。

機関支援

日本研究の分野において、各国で中核的な役割を担う大学や日本研究センターに対し、基盤を強化し、人材を育成するための支援をしています。研究や国際会議への支援のみならず、各機関のニーズに応じて教員拡充のための支援、客員教授の派遣、図書の拡充のための支援などを行っています。こうした包括的・継続的な支援により、世界中の日本研究機関の活動がより活性化するよう、事業を展開しています。

日米センター

[Center for Global Partnership]

日米センターは、日米両国が世界的視野で協力し、各界各層における対話と交流を促進するためのプロジェクトを実施しています。日米共同プロジェクトに対する助成、フェローシップ、専門家等の派遣・招聘、各種調査等の事業を通じて、グローバルな課題解決に向けた両国の対話の促進と担い手人材の育成に努めています。



1



3



2



4



5



6



7



9



8

1.「日欧(絆)プロジェクト～コミュニティが育む連帯と多様性～」でパネリストでもある音楽家が即興演奏も披露 撮影:相川健一／2.東京都大田区で江戸時代から続く刃物づくりを見学する、ロシアから来日した若手日本研究者／3.日独シンポジウム「東日本大震災と新旧メディアの役割-日独における地震報道に関する比較の視座」(ベルリン日独センター)／4.日系ブラジル人アーティストのチチ・フリーク氏が宮城県石巻市の仮設住宅の壁面にグラフィティを描くプロジェクト 撮影:相川健一／5.アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)で太田昌秀・元沖縄県知事らとの対話／6.10周年を迎えた「日中韓次世代リーダーフォーラム」／7.北京日本学術センター修士課程大学院生の訪日研修／8.日印文明対話公開シンポジウム「アジア・ルネサンス-洪沢栄一、J・N・タタ、岡倉天心、タゴールに学ぶ」／9.多文化の街新大久保を訪れる「日本・韓国・欧州 多文化共生都市国際シンポジウム」の参加者 撮影:相川健一

最新の知見で、 多角的な日本研究の発展をめざす

■第2回東アジア日本研究フォーラムを宮城県で開催

国際交流基金は、2011年12月、宮城県松島町において「第2回東アジア日本研究フォーラム」を開催しました。このフォーラムは、2010年12月に韓国・済州島で行われた「東アジア日本研究フォーラム」に続くもので、東アジア地域における日本研究をめぐる現状と課題を把握しつつ、国と地域を越えた研究者間のネットワーク構築を目指し、日本、中国、韓国の研究者が集まりました。今回は台湾からの参加者も含めて総勢26名を迎え、日本語による活発な議論が交わされました。

またフォーラムに合わせ、市民に向けて復興のエールを送る公開シンポジウム「東アジアは3.11をどう論じたかー東北復興へのメッセージ」を仙台市で開催するとともに、震災で大きな津波被害を被った東松島市の視察を行いました。

事業終了後、参加者からは「日本研究について、もはや一国主義、自国主義を乗り越えるべきである」、「東北復興のメッセージを東アジアの近隣諸国との横のつながりを考えながら発信していこうという姿勢に賛成である」等のコメントが寄せられ、東アジア地域の研究ネットワークを更に推進する重要性を再確認する貴重な機会となりました。

■アルザス・欧州日本学研究所で「大正／戦前」に関する集中セミナー実施

フランスのアルザス・欧州日本学研究所(CEEJA)において、国際交流基金は同研究所と共催で、「大正／戦前セミナー」を実施しました。学習院大学の井上寿一教授を講師に迎え、高い専門性と日本語運用力をもつ欧州の若手日本研究者10名が、2日間の集中ワークショップに参加しました。

「大正／戦前」をキーワードに、「グラフ雑誌『満州グラフ』

に見る戦前日本における満州国の視覚的プロパガンダ」「大正ロマンにおけるアール・ヌーヴォーの受容」「“アジア”を抱きしめて：アジア主義論の転換としての大正時代」など各自の最新の研究を巡り、議論を交わしました。

参加者に共通しているのは、日本人や日本在住の研究者とは異なる視点から日本の思想や文化構成の過程を研究し、より深い文化研究につなげていく姿勢です。国際文化交流として日本研究を支援することは、日本の専門的理解者を増やすだけでなく、実は日本に関する研究そのものを深化させ、日本についての多様な見方を育む効用もあることが実感される知的興奮に満ちたセミナーとなりました。

■米国の歴史ある日本研究を下支え

海外で日本研究が最も進んでいる国といえば、歴史的にも、人材や機関の充実度の面でも、やはり米国といえるでしょう。国際交流基金の米国での日本研究支援事業では、特別に諮問委員会を設置し、支援方針の策定ならびに支援先の選定について意見を得ています。

また、大学等の教育機関向けの助成事業では3年間の継続支援を通して教員の拡充や研究会議、学生向けの日本での研修等を支援し、日本研究の定着を図り、助成期間終了後には大学の自己資金での事業継続を促します。こうした支援により米国における日本研究者数は順調に増加してきたことが、国際交流基金が進める北米日本研究調査によりわかっています。

米国における日本への関心は震災により大きく落ち込むようなことはなかったものの、近年は米国国内の経済上の理由により、日本研究を含む地域研究全体に予算縮小の兆しが見られます。こうした状況のなかで米国の日本研究を下支えするための支援が必要になっています。



[上] アルザス・欧州日本学研究所での「大正／戦前セミナー」のようす

[左] 宮城県松島町で行われた第2回東アジア日本研究フォーラムのシンポジウム

日本研究の中核的機関、ネットワーク、研究者を総合的に支援

■中国、韓国で大型学術大会を開催

2011年9月に日本近世文学会・秋季大会が、韓国の高麗大で国際交流基金の日本研究機関支援を受けて開催されました。1951年に創設された同学会は、日本の近世文学を研究する日本における、もっとも代表的な学会ですが、国外での開催はこれが初めてでした。初の海外開催となった本大会は、日韓両国の報道機関から大きく注目され、プログラムの内容や意義が広く紹介されました。高麗大は、すでに日本研究が成熟した段階に達した日本研究機関ですが、韓国でこうした学会を開催したことは、韓国の日本研究をさらに促進する刺激となったと言えます。

また、中国の四川外語学院では、同年10月に国際シンポジウム「地域研究としての日本学—学際的な視点から」が開催されました。本シンポジウムでは、「中国における『地域研究としての日本学』の現状とあり方」など、現在注目を浴びている問題が議論されるとともに、中国各地の日本学研究者と日本の研究者とが活発に研究成果を交わしました。また、「地域研究」と「学際的な視点」のキーワードのもと、「新しい日本学」の萌芽についても語られました。

■年毎に充実するヨーロッパの日本研究ネットワーク

国際交流基金は、海外で日本への深い理解をもつ知日層の形成を目指し、日本研究者ネットワークへの支援も行っていますが、ヨーロッパではかつて長年にわたり言語・国家・大学間の壁に阻まれて、研究者の多くは孤立した形で研究を行ってきました。しかし、1973年にヨーロッパ日本研究協会が設立されて以降、研究者間の交流が活発に行われるようになり、今日、日本研究は学術研究の一分野としての確かな地位が築かれました。国際交流基金では、長年に渡り、ヨーロッパ日本研究者協会を支援し、日本研究ネットワークの発展を支えています。

2011年はエストニアのタリン大学にてヨーロッパ日本研

究協会の総会を実施、800人以上の参加者が最新の学術成果を発表・共有しました。震災後初めての大会ということもあり、国際交流基金は「震災が日本研究に与える影響」と題して特別セッションを設け、各国の研究者が活発な議論を交わしました。西欧に比べて、日本研究の分野では後発地域とされる東欧で総会が開かれることは、日本研究ネットワークの拡大において非常に大きな一歩であり、今後の更なる発展が期待されます。

■優れた研究をフェローシップで支える

海外の日本研究者は、それぞれの国で、学術的な知見に基づき、日本についての正しい情報・理解を広めることに寄与しています。国際交流基金は諸外国における日本研究の発展のため、日本に関わる研究を行う研究者が日本で研究や調査を行うためのフェローシップを供与しています。

2011年は、東日本大震災の直接的被害の甚大さが世界の注目を集めた一方、原発事故に対して海外から厳しい批判もありました。そのなかで、ロシアの元フェローでモスクワ国立国際関係大学のドミトリー・ヴィクトロヴィッチ・ストレルツォフ教授らは、バランスが取れた日本の情報を発信し、事実に基づかない日本について誤解の広がりを防ぎ、日本を研究する知識人としての役割を果たしました。

2011年度フェローでトルコ出身のシャーヒン＝エスラー・ギョクチェ氏は、ハーバード大学博士課程に所属して日本の「笑い」を理論的に研究するかたわら、日本の落語家のもとで修行、芸名を取得し、師匠や兄弟子とともに落語公演を行いました。「笑い」という各国の文化に深く根ざした難しい研究テーマを理論と実践の両面から研究し、その成果を学会だけでなく広く一般の日本人との交流にも発展させたといえます。

人文や社会科学など幅広い研究テーマの優れた研究者を支えることで、世界の日本研究の発展に貢献しています。



[上] 北京大学現代日本研究センターの訪日研修

[右] 国際文化会館（東京）で開催された日本研究フェローの懇談会



多層的、多角的な国際相互理解を推進し、世界の発展と安定に向けた知的貢献を

■ 10周年を迎えた日中韓次世代リーダーフォーラム

国際交流基金は、2002年度から中華全国青年連合会(中国)と韓国国際交流財団との共催で、日本・中国・韓国の若手リーダーによる対話プログラム「日中韓次世代リーダーフォーラム」を、2010年度までに合計8回開催し、累計の参加者数は、日本46名、中国42名、韓国45名を数えます。

このフォーラムは、毎年、日中韓3カ国の政治、行政、ビジネス、学術、メディア、NPOの6分野から、次の世代のリーダーと目される若手知識人が、10日間の日程で寝食を共にして3カ国を旅しながら、現場視察や意見交換・討論などを行うものです。濃密な日程を共にした「仲間」として、国や立場を超えた信頼・友情関係は、フォーラム終了後も継続しています。

2012年3月28日には、本事業の10周年を記念して、今後の日中韓関係を議論する特別フォーラムを実施しました。過去に本フォーラムに参加した3カ国・29名が再集結し、政治・経済・市民社会の3つのグループに分かれて議論を重ねました。その成果は、“Vision 2030 for Northeast Asia”という提言にまとめられ、翌29日には、玄葉光一郎外務大臣に手渡されました。

■ 中東次世代リーダー招へい:「アラブの春」と東日本大震災

2012年2月19日から10日間に亘り、エジプト(6名)、ヨルダン(6名)、チュニジア(4名)の若手リーダーを日本に招へいし、「国づくり・地域づくりにおけるリーダーシップ」をテーマにグループ研修を実施しました。参加者は、若手研究者、政府関係者、ジャーナリスト、NGO職員等さまざまな分野で活躍している求心力や発信力を有する次世代のリーダーと目される若手職業人たちです。

2010年暮れから勃発した「アラブの春」と2011年に起きた東日本大震災により、期せずして両国・地域が直面する

ことになった「社会復興」という問題を「リーダーシップのあり方」という大きな視点に、「コミュニティ再生」、「若者の農業帰帰」、「障害者就労」等の具体的テーマから切りこんでいきました。日本とアラブの双方の次世代のリーダー達は、レクチャー、ワークショップ、地方視察等を通じて互いの活動状況に耳を傾け熱のこもった意見交換を行いました。

■ 仮設住宅に描かれた希望の壁画

東日本大震災で被災した人のための仮設住宅「トゥモロービジネスタウン」(宮城県石巻市)で、2011年12月と2012年4月の2回にわたり、日系ブラジル人アーティストのチチ・フリーク氏を招き、仮設住宅にカラフルな壁画(グラフィティ)を描くプロジェクトを行いました。

応急的に設置されるという性格上、仮設住宅の外見は無機的・没個性であり、また被災を契機に異なる居住地から同じ仮設住宅に入居したことから、コミュニティとしての人間関係もまだ新しくスタートしたばかり。そんな状況のもと、グラフィティ・アートは「住まい」に彩りを添えるだけでなく、それぞれの棟の住民ごとにどんな絵を描いてもらうかを話し合うことで、住民同士の会話のきっかけをつくる役割を果たしました。

棟ごとに異なるモチーフで描かれた壁画は、画一的な仮設住宅に「アイデンティティ(個性)」を与えました。また壁画の制作過程でアーティストと、また住民同士で繰り広げられる世間話が近所付き合いのきっかけになり、これまで住民同士のつながりが薄かった仮設住宅に、たくさんのコミュニケーションと笑顔が生まれました。仮設住宅に出現した大きな絵は、そこに住む皆さんの誇りとなり、現在も希望の糧となっています。



[左] 日中韓次世代リーダーフォーラムの記者会見
[中] 谷根千地域(谷中・根津・千駄木エリアの総称)を舞台に、新たな「場」をつくることを通して市民社会の基盤づくりをおこなっている広石拓司氏と意見交換する中東の次世代リーダー達
[右] 石巻の仮設住宅にカラフルな壁画を描くチチ・フリーク氏 撮影:相川健一

世界が直面している共通の重要課題に 日米両国が世界の人達とともに解決を目指す

■日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム

東日本大震災後の被災地で復旧・復興を支えた市民とコミュニティの強さ。それを今後の中長期的な復興と日本の再生につなげていくことはできないだろうか？ そのための鍵を求めて、2012年3月5日、「震災復興から日本再生へ：明日を拓く市民社会」と題するシンポジウムを、仙台国際センターで開催しました。

外務省は2000年より「日系アメリカ人リーダー招へいプログラム (JALD)」を毎年実施しており、国際交流基金はそれに合わせ、これまでもさまざまなテーマでシンポジウムを企画してきました。今回は、震災の発生直後から全米で復興支援活動に奔走してきたJALD参加者からの強い希望により、仙台での開催が実現しました。

シンポジウムでは、仙台で震災復興に携わるNPOや社会起業家を日本側パネリストとして招き、コミュニティ再生のために市民社会が果たす役割や日米の協力の可能性など多様なテーマについて、米国の日系人の経験と対比しながら活発な意見交換が行われ、日系アメリカ人と日本人の間で相互交流・理解の機会となりました。

■米国アジア研究専門家招へい事業

近年、中国やインドなど、アジア諸国が急速な発展を遂げて国際社会で存在感を増し、米国での日本に対する関心が相対的に低下していると言われていています。こうした状況に対応するため、新たに「米国アジア研究専門家招へい事業」を開始しました。この事業は2010年11月に行われた日米首脳会談に際して発表された「日米同盟深化のための日米交流強化」イニシアチブの一環として企画されたものです。

2011年12月に、米国においてアジア研究分野の第一線で活躍する研究者5名が来日、1週間の滞在中に、中央省庁、大学、シンクタンク、民間企業、NGOなど多くの機関を精力的に訪問しました。参加者からは米国内では知ることのできない日本の現状について、幅広い分野の関係者と率直な意見交換を行えたことは大変有意義だったとの感想が寄せられました。

日・米・アジアの間での人的ネットワークの構築と、相互理解・協力の促進を目指し、今後も継続して実施を予定しています。

■日米アジアジャーナリスト会議

日米両国の共通課題をアジアという舞台上で位置づけ、グローバルな視点とリージョナルな発想からジャーナリストが話し合うラウンド・テーブル「日米アジアジャーナリスト会議 (Common Agenda Round Table, CARTプロジェクト)」を、CART事務局、中国・上海日報社との共同事業として2011年12月4日～5日に上海で開催しました。

2回目の実施となる今回の会議では、東日本大震災後のメディアの役割と課題、APEC首脳会議や東アジアサミット後のアジア太平洋地域における外交、従来のメディアとインターネットメディアとの関係等が議題になりました。

会議には日・米・中3カ国の主要紙のジャーナリストやアジア特派員をはじめ、東南アジアやインドのジャーナリストも参加し、活発な議論が交わされました。

今回のプロジェクトにより、日・米・アジアのジャーナリストの間で問題意識が共有され、相互のネットワークが一層発展していくきっかけとなることが期待されます。



[上] 上海で開催された日米アジアジャーナリスト会議
[左] 仙台で開催された日系アメリカ人シンポジウム「震災復興から日本再生へ」